

高校生へ 私が選んだ1冊の本



「三つの石で地球がわかる」

藤岡 換太郎：著

講談社

「カレーにたとえた地球」

大阪府

大阪府立春日丘高等学校

植木 智大

「三つの石で地球がわかる」—私はこのタイトルから高校生には難しい内容が書かれている本だと思っていた。しかし、この本の冒頭、「はじめに」では、石や岩がつく名字が多くあることを例に挙げて、石というものが私たちの生活に密着した、ごく身近なものだと述べられていて、私はとても納得することができた。さらに、筆者は石が私たちの身近なものとした上で、これまで「石ころ」と呼ばれ、一緒にたにされてきた石には名字と同じように、物凄くたくさん名前があると述べている。しかし、一般の人々がせっかくなりに興味を持って、勉強してみようと思っても、岩石や鉱物の本には難しそうなお名前が並んでいて、げんなりしてしまうことが多い。そこで筆者は、石というものの本質が分かる三つの石についてこの本で紹介するとしている。

ここまで読んで私は、自分にも楽しく学べるような内容なのではないかと思えてきた。さらに、「はじめに」を読み進めると、「では、その三つとは何という名前の、どのような石たちなのでしょう。本書では、タイトルにも表紙や帯にも、どれがその三つなのかはあえて記していませんので、ぜひこの先をご覧ください、ご自身でお確かめください。」と書いてあった。私は最初にこの本に対して苦手意識を持っていたことなど忘れて、夢中で続きを読み進めていった。

全体を読み終わって持った感想は、具体例がとても多く、頭で岩石を想像しながら読み進められたこと、岩石についての説明が丁寧すぎるほど丁寧で読み終わった時に頭にモヤモヤが残らなかったということだ。実際にどのような具体例があったかということ、ビッグバンで水素とヘリウムの原子核ができるまでの時間をインスタントラーメンで表現したり、地下深くのマントルを構成する橄欖（かんらん）岩が高速で地上に上昇してくる過程をダイヤモンドで表現したりしていた。また、この本の一番の特徴とも言うべき点が、とても丁寧な説明だと思う。突然、筆者が主張したい「三つの石」について説明を始めるのではなく、石と岩の違いや、石を構成している元素がビッグバンによってどのように発生したかなど、「三つの石」について説明する前に、およそ三十ページも岩石について

の基礎知識や一般の人々が抱く素朴な疑問などについて説明している。それにより、ためになった知識がたくさんあったと共に、後半を読み進めるための土台となっていて、本の内容の難易度が上がっていても、とても読み進めやすいと思った。丁寧に説明がなされているのは、文章の内容が「三つの石」についてになっても同じで、それぞれの石の名前の由来、石の溶け方、色、粘度などについて、その石が観察できる具体的な地方を挙げながら説明がなされていた。それに加えて、それぞれの「三つの石」の説明の締めくくりには、その石について研究した研究者について、その方の功績や研究方法などを交えた補足説明もなされていて、その内容は私にとってとても興味深く、面白いものだった。

そして、「三つの石」すべてについて説明がなされた後は、いよいよ化学や地学を交え、かなり専門的な内容で地球上の岩石について説明がなされ、内容の難易度もぐっと上がったが、本格的に説明がなされる前に、本の最初で説明された基礎知識について復習が用意されていたり、化学を用いて岩石について説明する際に重要になる、共有結合やイオン結合の補足説明が図を大きく用いてとても丁寧に説明されていたりしたので、難しく感じる箇所は無かった。それだけ丁寧に説明がなされていた。この説明の際に筆者はマントルが何種類かの岩石に変容する様子の例えにカレーライスを使っていた。カレーもマントルもドロドロしていてボコボコ泡が湧き立つイメージがあり、冷えると粘りが強くなるという点において、とても分かりやすい例だと思った。

本の最後の内容には、より高度な内容の説明を用いて、筆者が最終的に読者に向けて説明したかった、現時点で解明されている地球内部での目で見ることができない活動の様子や地球が誕生してから大地、大陸、プレート、マグマなどがどのような活動をしてきたかなどが最も詳しく説明されている。

私はこの最後の文章を読んで、このような高度な内容を高校生に理解できるように説明した筆者の文章が素晴らしいと思った。